

BOOK REVIEW

エンド・オブ・ライフケアとしての拘縮対策 —美しい姿で最期を迎えていただくために—

「思い」「知識」「技術」。医療やケアへ向けた論評で、これらの言葉が単独で使われる際は批判的な意味合いをもつことが多い。「思いだけで何ができるのか」「知識だけで人を癒すことができるのか」「技術に溺れてケアがおろそかになっていないか」云々。しかし、この3つが1つでも欠けた医療やケアは存在しないことも明らかである。

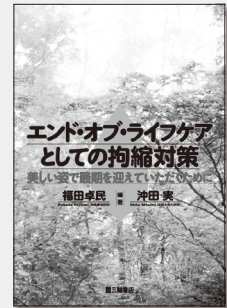
本書はこの矛盾をあっさり飛び越えて、「思い」と「知識」「技術」が三位一体となることの意味とその方法、さらにはそれによって具現化される「良い医療とケアの姿」を見事に示してくれている。

病院の大部屋のベッドの上や、自宅の布団の上に「ただ寝かされ」、拘縮と褥瘡が、死を前にした必然であった時代を知っている。その時のことを思い出すたびに、拘縮をなくしたいという「思い」は強い。ではどうすれば拘縮に立ち向かえるのか、文献を読みあさって「知識」を求めた時代もあった。先達が築いてくれた「技術」を学んで

もきた。これが評者である私の歴史である。そのうえで、今の医療とケアを見ると、個々の尊厳を守ることが常識となり、拘縮に対する科学的な根拠に基づいた「知識」や「技術」も明確に示されている。では、なぜいまだに、拘縮、あるいは不良姿勢に苦しむ人が数多くいるのだろうか。この問題意識は常に私の頭の中にある。

このところ、「看取り」について考える機会が多い。教えを受け、討論をする相手は、臨床哲学、死生学、倫理学、宗教を専門とする人と幅広い。そのような機会を経て、医療やケアを具体的なサービスとして提供するわれわれの責任の重さを再認識し、少しでも良いサービスで、それを必要とする人たちに伝えたいと思う。

では、そのために何を考え、何をすれば良いのか。もし、そのような問いをお持ちの方がいらっしゃったら、ぜひ、本書を手にとっていただきたい。私は本書に出会って、一歩前に進むことができた。



●福田卓民，他＝
編著

(A5判/192頁/3,200
円＋税/三輪書店/
2014年)

評者

▼
備酒伸彦

神戸学院大学総合リハビリテーション学部 教授、
理学療法士